

教職大学院

Newsletter

No. 22

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2010.05.22

学びあうことが持続可能な学校文化の形成へ

東京大学大学院教育学研究科 秋田喜代美

教師の専門性の開発に関して、教師個人の学習が中心に語られた1980、90年代に比べ、21世紀になってからは学びあう組織としての学校のあり方の重要性が教師教育分野でも一層いわれるようになってきている。この点で、福井大学附属中学校は、教員も生徒も共に学びあう新たな活動システムの構築に附属の先生方と福井大学の先生方がしっかり連携して挑戦し取り組んでこられた先進的かつ稀有な学校改革事例である。本を出すまではよかったがそれで終わりの学校、特定の校長先生の時には改革はできても異動があれば終わりの学校、研究主題を流行の話題に変えることで先生が安心して研究できない学校などが多い中で、じっくり・ゆっくり・じっくりくるまで、先生たちが年月をかけて築いてきたからこそ、校長や研究主任が代わり、教員の移動が毎年起こっても、崩れることなく新たな展開を生み出す学校文化が福井大学附属中学校には醸成されてきていると思う。それは始めはよく分からないがやっているうちにやっぱりいいという実感、この学校で学べたという先生と生徒の手ごたえによって支えられているからである。OECDが出した『学校のリーダーシップを向上させる：その政策と実践』という本がある(Pont, Nusche, Moorman, 2008)。学校のリーダーシップといえは校長の学校経営や管理運営のことと思われがちだが、学校に働く教師たちがそれぞれキャリア段階でその人の良さを引き出し学び合えるような組織、教師が責任をもって自分達のカリキュラムを自立的に開発し相互にモニタリングできる重要性が指摘されている。福井大学附属中学校では、カリキュラムと授業実践、実践の省察のつながりがサイクルとして生まれるように組み立てられてきたことによって、先生たち個々のリーダーシップをこのプロセスの中でひきだしてきたと言え

るだろう。先生お一人お一人の顔と味わいのある実践が、カリキュラム、実践、実践記録のありようを保障する学校づくりが、福井大学附属中学校だけではなく、これからのどの学校の学校づくりには求められていくのではないだろうか。教師の専門家による学びの共同体(Professional Learning Community)といえは、しばしば引用されるのが、Richard DeFour(2004, 2008)である。彼は専門家の学びあう共同体の6つの原理を挙げている。「1 ミッション(目的)、ビジョン(明確な方向性)、価値(集団としての価値)、目標(指標、時期、対象)を共有しすべての人が学びに焦点を当てること、2 学びに焦点を当てた協働的學校文化を形成すること、3 学校全体でベストの実践を探究していくこと、4 実践し学んでいくという行為志向性、5 絶え間ない進歩への関与、6 意図や理念だけを語るのではなく生徒の学びの実態から成果をみつめていく成果志向性」である。福井大学附属中学校の改革の持続可能性はこれらの6つの原理をまさに自分達の実践の中から学び実現してきたのだと、DeFourの言葉を借りながら改めて感じる事ができる。学校、地域、文化を越え、学校改革には共通の原理がある。それは、子ども一人ひとりの学びから学ぶことに始まり、学校全体の学びへと広がる、学びの文化の希求である。

内容

- 学びあうことが持続可能な学校文化の形成へ(1)
- 4月の合同カンファレンスを終えて(2)
- スタッフ紹介(4) 院生紹介(8)
- 拠点校だより(12)
- 平成22年度の更新講習がスタート!(16)

4月の合同カンファレンスを終えて

4月24、25日に今年度最初の合同カンファレンスが行われました。グループに分かれてこれまでの歩みを紹介しあい、「実践記録を読む／書く」意味についての基調報告を受けて、各自修了生の長期実践報告を読み解いて、感想や自分自身の実践を語り合うセッションを行いました。今回は4人の院生の感想を紹介します。

スクールリーダー養成コース1年／高浜町立和田小学校 松見 浩司

初めての合同カンファレンスは不安と期待が交錯した中で始まった。ようやく院生生活がスタートした。

1日目の午前中は、グループごとで自己紹介（自分の歩みや今まで大切にしてきたこと）をして意見交換を行った。その中で、私が一番心に響いた言葉は、M2のある院生の言葉であった。「常に教師が伸びていくシステムを作っていきたい。」「先生方が楽しみにしてくれる研修会にしていきたい。」。同じ県内に、事後研究会のスタイルを変えていこうと考えておられる先生がいることに驚いた。

1日目の午後からは、今までの実践報告書から、実践者の成長やそれを支えている要因を探り、レポートにまとめた。私は、松宮弘明先生の実践報告書「協働による授業改革を目指す～国語科の授業改革を通して～」を読んだ。松宮先生は、国語科の授業改善と事後研究会の見直しを中心に実践を進めら



れた。授業改善では、探求学習の確立とコミュニケーション力の育成を中心に取り組まれた。また、事後研究

会の見直しでは、参観者が児童の姿を通して考えたことを中心に話し合う研究会を目指された。大変参考になることが多く、今後の実践でぜひ試していきたいと思った。

2日目は、また別のM2の院生とスタッフの先生から心に残る言葉をいただいた。院生からは「実践をあまり急がなくていい。粘り強く時間をかけてじっくり取り組んだ方がしっかり根付くはずだ。」と言われた。適切なアドバイスをいただき、あせらずじっくり取り組んでいこうと思った。また、スタッフの先生からは、「小学校は学級王国になりがち。教師全員で児童全員を育てていこうという気持ちが大切ではないか。」と言われた。勤務校では、今年度から縦割り班活動を今まで以上に充実させていこうと共通理解したところである。これから、教師全員で児童全員を育てていこうという雰囲気が盛り上がり上げていくように実践していきたい。

さて、最後に、4月の合同カンファレンスを終えて思うことは、日頃職員室でなかなか話することがないような話をたくさん聞くことができ、大変自分のためになったということである。これから実践をしていく時に不安がないと言えようことになる。しかし、大勢の先輩から、「たくさん失敗すればいい。」と言われた。失敗を恐れず、まず、自分から実践していきたい。

スクールリーダー養成コース2年／越前市武生東小学校 内田 達男

いよいよ教職大学院の2年目が始まった。久しぶりにコラボレーションホールに入ると、スクールリーダーコースの院生の人数も多くなり、昨年より活気があるように感じられた。1年目の院生や新たな大学院のスタッフの方々との交流から、どのような新たな学びが得られるのか、楽しみになった。昨年の4月のカンファレンスを思い出すと、自分は大学院に何をするためにきたのか、どうすればいいのか全くわからずに不安のかたまりであった。しかし今年は、大学院での1年間の学びから、勤務校で何を実践していこうかという見通しが立っていたので昨年ほど不安ではなかった。

合同カンファレンスの最初は、おきまりの長めの自己紹介。最初から衝撃的だったのは、謙虚に、そして素直に自分のこ

れまでを振り返られているお二人の先生との出会いだった。不登校児童に対して上手く対応ができなかった自分のこと、ご本人が不登校を体験し、高校や大学に通わず後に大検をとって教職についていることを語っていただけた。20年以上教員をやっても、自分には知らないことや体験できないことがある。しかし、教職



大学院で様々な立場の人といろいろなことを語り、聴くことで、自分の視野が広がっていくような気がする。2年目ということで、長期実践報告をまとめなければいけないというプ

私は今年度本大学院に入学し、合同カンファレンスで学ばせていただいたのは今回が初めてだったので緊張していました。教職専門性開発コースの院生だけで行われている木曜カンファレンスとは違い、スクールリーダーコースの方々もいらっしゃるからです。4月からインターンシップをはじめ、一か月という短い期間ではありますが様々なことを経験し、考え始めました。しかし、たかだか一か月、私の感じていることは現職の先生方にとっては取るに足らない悩みのだろうと思うと、恥ずかしい気持ちがありました。

しかし、いざクロス・セッションを行ってみると、私の考えは杞憂だったことに気付きました。私の考えに耳を傾け、抱えている問題点を一緒に考えて下さったからです。共感しあう場面も多々ありました。それまで一人では思いつかなか

4月24、25日に今年度最初の合同カンファレンスが行われました。昨年度も経験しているため現職の先生も集まって話しをするカンファレンス自体に緊張はありませんでしたが、自分の実践を「語る」ことに対してはとて緊張していました。

1日目は、主に自己紹介を小グループで行い、松木先生のお話を聞いたり、卒業生の実践記録を読み合いました。1番印象に残っていることは、松木先生のお話に出てきた「実践を語ることは、事例に磨きをかけることだ」ということです。自分の実践に自信がないというわけではないですが、実践を「語る」ことに抵抗がありました。聞き手にわかりやすく伝わっているか、ということ意識しながら話ししているととても不安に思うからです。この大学院に来て、「語る」



機会が多くなったと感じます。最初の頃よりは慣れましたが、まだ少し苦手です。しかし、「語る」

レクチャーはあるが、校種や職業を越えて語り合えるこれからのクロスセッションがますます楽しみである。

教職専門性開発コース1年 林 克磨 (坂井市立丸岡中学校インターンシップ)

ったことを指摘されたことで、新たな課題を設定することができました。また他の先生方が抱えている問題点から新たに考えることも多くありました。結果、学校種も年代も立場も異なる者が集まって話し合うというのは、たいへんよい刺激となりました。

私にとって今回の合同カンファレンスは、考えを共有することで学びを深める場以上に、これからの自分の実践に自信を持って臨んでいこうと思える場となりました。実践を共に考えて課題を解決しあう仲間がいると感じたからです。合同カンファレンスという貴重な場で省察するためにも、日頃から積極的に挑戦して実践を積み重ねていこうと思います。合同カンファレンスは私にとって有意義な学びの場となりました。非常に良い経験をさせていただいたと感じています。

教職専門性開発コース2年 北島 亜実

ことは自分の実践を高めることにつながっているということを知って、「語る」ことで得られる学びについて考えることができるようになりました。そう思うと「語る」ことに対しての意識が少し変化したように思いました。

2日目は、1日目に読んだ実践記録や自分の実践についてまとめた後に、小グループ毎に報告しあいました。2年目の人たちは、自分の実践について報告をしました。報告する中で、「うまく自分の実践が伝わっているか」が不安でしたが、「語った先に新しい学びがある」ということを思うといつもより緊張は少なくなりました。報告したグループの中の先生方は、それぞれ校種が違ったので様々な角度から自分の実践に対してのアドバイス、実践についての私とは違った意味づけを聴けることができるとも勉強になりました。「語る」ことで私自身、2つの角度からの学びがあったように思います。1つは自分の話し方や順序など話し方のスキル面での学びがありました。2つ目は、経験が豊富な現職の先生からは、自分自身では考えつかないようなアドバイスを頂くことができました。そのアドバイスによって自分の視野を広げることができ、実践をもう一度振り返って考えていきたいと思いました。この2日間の学びを今後の自分の実践につなげていきたいです。

Staff 紹介

今年度から新しくスタッフが加わり、ますます多様化しています。新しいメンバーに、これまでの歩みや教職大学院への思いを語ってもらいます。

北野 範子 きたの のりこ

この度、教職大学院スタッフの一員として、かかわらせていただくことになりました。どうぞ、よろしくお願ひします。

2年前に教職を退き、今、初めての作物づくりに夢中です。見知らぬ世界は魅力的で、興味が尽きません。この年齢になっても新しく知るといことが、分かるってことが、こんなにも面白くわくわくするものだとは思いませんでした。この新鮮な気持ちで、在職中、夢中になっていた特別支援学校でのことを思い出させます。印象深かったこと二つを述べます。

一つは、私が初めて特別支援学校に赴任した時のこと。養護学校が義務化された年で、皆手探りの状態だった。小規模校だったので、事務の方や校務員さんが、目にした子どもの情報を寄せてくれ、学校全体で子どもを見守っている、そんな温かさに満ちていた。行事を企画するときは、得意とする動きを引き出そうと、子どもの話が絶えなかった。教師の数が少ないだけに、納得のいく話し合いができ、複数の教師の目で見取っていく実践の確かさを感じ取れたのもこの時期。研究会で、「事例研究をするときには、2～3か月ごとにまとめていくと、その作業を通してこれからどう進めばよいかを考えることになる」と教わり、これはその後まで大変役立った。文部省指定の実験学校となり、研究が盛んに行われ、子どもって変わるんだ、と感じ合えた気持ちの高まり。多くの貴重なことを心に焼き付ける時期となった。

二つ目は、その後転勤し、出会った学習会でのこと。月に1回程度、実践とVTRを持ち寄り話し合う。午前0時には終えようと、少人数だけど意見をはっきり言う人たちが集まっていた。この時期の学びが、自分を支える原点になっていたように思う。私がそこで報告したよっちゃん(仮名)の実践。

よっちゃんは、中2の男子。課題をせず、教室を抜け出していく、したいことができなかつたり気が向かなかつたりすると、攻撃的な行動に出る。敏感な子だけに、言われたことへの心の負荷を抗議の形で解消しているように見

受けられた。私たちは、学習したくなるような題材探しをしたり、自分の段取りで活動を組めるような状況作りをした。必死だった。それでも私は、よく腕をかまれ、まだ十分な対応になっていないと彼はメッセージを送ってきた。

「かませる状況を作っていないながら責めている」厳しい言葉を仲間から。その言葉を繰り返しては自分に問う。あの子が「いやっ」と拒否しているのに、どかどかと入り込もうとするから怒るのである。学習会がグイッと舵をきるきっかけを作ってくれた。私は腹をくくった。そこが変われると不思議と気持ちに余裕が出てきた。私は、体の大きい彼からかみつかれるのが怖くて、腰が引けていたのである。自分をしっかり受け止めてくれる者ではない、彼は見抜いていた。

ある時女の子と筆入れを取り合っていた。女の子は取られるのかと大きな声で叫び、彼は、それをもぎ取って隣の部屋に飛び込んだ。「あんまりきれいだから、片づけてあげたくなっただけやよ」と言うと、よっちゃんは、その子の机の中に筆入れを片付けた。これを記しながら、起こしてしまった行為に彼が困らぬよう、柔らかにサポートする立場に徹底して立つ、そんな方法もあったかなと感じている。彼を賞賛したり、本人の意思で決められる生活が功を奏し、よっちゃんのリズムに合わせる子どもたち、私を含め彼を取り巻く人たち、それがものすごく変わった。そしてお母さんも。気がかりなことは激減し、以前のことが嘘みたい、と思える事態になった。

子どものとらえ方に気付いていくことで、子どもの育ちそのものが変わる、そんなことを学べた私です。よろしく。



山下 忠五郎 やました ちゅうごろう

1年前、2009年3月31日、福井市至民中学校を最後に37年間生業としてきた教員という仕事に終止符を打ちました。至民中学校が福井大学教職大学院の拠点校であったことがご縁となったのでしょうか、今年度からスタッフの一員として関わらせていただくことになりました。どうぞよろしくをお願いします。

教員としての37年間、転機が何回かありましたが、最後の至民中学校は私自身が大きく変わった3年間でありました。ちょうど教育基本法や学校教育法などの法改正、学習指導要領の改訂がおこなわれ、国を挙げての学校改革がまさに始まろうとしている時期でした。加えて、至民中学校は2年後に異学年型教科センター方式による「移転開校」を進めている時でもあり、私自身が学校改革の先頭に立たなければならないという状況に置かれました。

至民中学校の学校改革の柱は、生徒と教師が何よりも授業を大切に、共に成長していくことができる『学び舎』としての本来の中学校づくりを目指すもので、教科の授業づくりを中心とした学校改革でした。学びの場としての「教科センター」、生活の基盤としての「異学年クラスター」、社会の一員として生きていける力を育む「地域連携」の3本の柱をたて、子どもが学びたい、保護者が通わせたい、教師が勤めたい学校へと大きく舵を切ったのでした。

2006年、「挑戦！新生至民中教育」をスローガンに、「70分授業」「ドリルタイム」「朝読書」「ノーチャイム」「みんなで行きさ！至民中へ」などの新たな取組が始まりました。一方、私たち教員自身の力量を高める取組も始まりました。年2回の授業公開、参観者の手による参観記録、実践記録、学習履歴を取り入れたカリキュラム作成などの「書く作業」を通して高めていこうとするものでありました。また、至民中での学習の仕方を解説した「Shimin Study Life(SSL)」の編集も始まりました。

2007年、開校準備のための取組が始まりました。異学年での活動（現 クラスター活動）に向けて、主な学校行事は異学年のグループで実施しました。地域との連携・交流で



は、「ギャラリーしみん」（年3回実施）、地域活動へのボランティア参加、親子で学ぶ70分授業（後に、地域公開講座へと発展していく）、子育て応援！井戸端サロンなどを始めました。生徒・保護者・地域・学校が共に成長していけるようにとの願いを込めた取組でした。そして、校内の組織はスタッフ全員が研究・学校運営に関わることができるようになりました。

2008年、地域のみなさんの永年の夢であった新至民中学校が開校しました。教科センター方式、異学年の自治によるクラスター運営、オープン型の教育活動、学習環境づくり、至民中学校ボランティアガイドや至民アカデミー倶楽部の創設、年間を通じた学校公開などなど、私たちが目指す学び舎としての実践が始まったのです。

至民中学校の取組は「中学校教育の未来を切り拓く」ものであり、これからの変化の激しい時代を生き抜く子どもたちに対する私たち教師集団の責任の現れでありました。

こういった体験を生かしながら、少しでもお役に立てればと思っています。そして、この機会に、自分自身の教職37年間の省察もできたらなあと思っています。いずれにしても、足手まといにならないよう、院生のみなさんと共に学ぶ姿勢で臨んでいきたいと思っています。

よろしくをお願いします。

渡邊 本爾 わたなべ もとじ

今年4月から講師として加えてもらったことを喜んで
います。約40年の教員生活のうち、半分は学校現場で、
あと半分は、福井市教育委員会に勤務しました。学校は、
僻地複々式小学校、小中併設校、大規模中学校、附属中学
校の教員として、また、3年間は小学校長として、学校の
経営にも当たりました。福井市教育委員会では、指導主事、
管理主事、学校教育課長を、そして、退任までの8年間は
教育長として、市内幼小中学校の教育について、行政の立
場から何ができるかを考えてきました。教員としては少し
変則的な経歴ですが、大学院においては、これまでの経歴
を少しでも生かして、教育のあるべき姿を問い続けて行き
たいと思います。よろしく願いいたします。

学校現場の課題から

1. 「少子高齢化」の流れに歯止めがかからず、福井市内
の子供についても、一部の学校を除いて大半が下降線をた
どってきました。学級編成と教員数は連動する関係上、学
級減は教員減となり、学校運営にも支障をきたし、また、
子供の生活にも様々な問題が起こってきています。「少子
化」の中で一体子供をどう育てようというのか、長期的な
展望を持って明確にしなければならぬと思います。
2. 「教員の多忙化」については、行政と現場が一体とな
って取り組むべき課題だと考えてきました。「多忙化」＝
「子供と向き合う時間がない」という悩みも聞かれますが、
「授業」こそ「子供と向き合う時間である」と捉えること
が大切であり、授業で子供とどう向き合うか、学校や教師
は真剣に考えるときだと思えます。
3. 「教育改革」は、法的にも制度的にも急ピッチで進め
られてきました。現在、子供と直接かかわっては、学習指
導要領の改訂に伴う新しい教科書の採択が、小学校から始
められます。その中でカリキュラムをどうするのか、授
業をどうするのか、改めて問われることとなります。「授

業改革」の
取組みが
一層重要
になって
くるわけ
です。

4. 「学校 週5日制」

は、平成14年度から完全実施になりましたが、子供の「学
び」という点では、必ずしもよい結果をもたらしたとは言
えません。更に、連休を多くして、経済効果を高めよう
という施策が進められ、「学びのリズム」や「学びの継続」
ということでは、課題の多いのが現状です。学校と保護者、
地域がいかに連携していくか、「子供の学び」の面から検
討していかなければならないと思います。

教職大学院に期待すること

多くの課題を抱えて、学校や教師は、日々子供の教育に
当たっているわけですが、一人ひとりの力量に負うところ
は、極めて大きくなっています。と同時に、学校が組織と
して作用することによって、個々の教師の力量を更にアッ
プし、全体としても子供一人ひとりにかかわっていくこと
が求められています。教職大学院は、自己改革、自己革新
の場と時間を提供してくれる貴重なところでは、そこで学
んだ教師が、今後の自分展開をどのように図るのか、大い
に期待したいところです。現場と現状のギャップに悩むこ
とも多いのではないかとと思いますが、協働して実践と研究
を推進していきましょう。



富永 良史 とみなが よしふみ

■ホロ酔いアタマに電話が響く

非常勤講師への就任について、当時の専攻長、寺岡先生から突然のお電話をいただいたのは、とある宴席の真っ最中。ホロ酔いアタマには、最初、先生が何をおっしゃられているのか理解できなかつたことだけは、よく記憶しております。丁寧で優しい語り口に耳を傾けるうちに、教職大学院の存在理由とシステムが染み入るように理解できたのと同時に、「僕で良いのだろうか？」という戸惑いがホロ酔いを醒しました。なにしろ教職歴ゼロで、教育実習すらしたことがないのですから。

■失われた話しあいを求めて

僕はファシリテーターを職業としています。簡単に言うと、対話と学びの場を生み出す人です。言い換えると、『3人寄れば文珠の知恵』が実現する場を生み出す人です。チーム（の話しあい）の成果を高めるためのワークショッププログラムを、企業、行政、市民、大学に提供しています。

『3人寄れば・・・』とは古来から言われ、日常でも「徹底的に議論」などのセリフはよく耳にします。なのに現実には、『3人寄ったら、混線、脱線、平行線』とか「徹底的に抗戦」ばかりが目につくのは、とても寂しく、本来、話しあいに宿っていたはずの「学び」や「創造」の可能性が失われているのではないかと思います。話しあいの可能性を取り戻すファシリテーターを職業にしたのは4年ほど前のことです。

■答え、教えてくれないんですか？

ファシリテーターになる前は「答えを出す人」（コンサルタント）をしていました。お客様の状況を調査分析し最適解を提案する人です。続けるにしたがって、年々違和感と戸惑いが深まってきました。「当事者であるお客様の答えを、ヨソ者が出してしまつて、それでやる気になるのか？行動し続けられるのか？」

しばらく煩悶し「ヨソ者が出した答えより、自分で出した答えの方が、やる気になる。なら、みんなで話しあつて答えを探した方がいい」と考え、「答えを出す人」から「対

話の場を創

る人」になり

ました。以来、

「答えを教

えない講師」

として、対話

型ワークシ

ョップを提供し、「答え、教えてくれないんですか？」と

いう受講者の方々からの圧力に挫けそうになりながらヨ

レヨレと立ち向かう日々です。



■人は過去を語る時、神になる！

過去を対話することについて、尊敬する経営者の方の言葉が今も余韻を残しています。「人は過去を語る時、神になる」。真意は確かめませんでしたが、勝手に2つの解釈を見つけました。「過去をかつこ良く飾りたくなるから謙虚に」という自戒。そして「過去を語りなおした時、新しいチカラを手にすることができる」という希望。

いくつかの長期実践報告を読ませていただき、それについてスタッフの皆さんと語り合う時、体験に含まれる豊かな意味を発掘しているような感覚になります。それは自分の過去に埋もれた体験を発掘し捉えなおすことにつながっているようにも感じています。そこには確かに、一步を踏み出すチカラの感触があります。

■酔いから醒めて、意味を探す

教育実習歴もない僕が、この教職大学院のスタッフに加えていただいたことの意味を、皆さんとの対話の中に探し求めていきたいと思っています。どのような態度、考え、プロセスが豊かな対話を生み出すのか、より良い対話は何を変えうるのか、を探し続けようと思っています。対話を見つめること、対話の中に混じりあうこと、対話から学ぶことが、何より好きですし、そこにこそ過去を読み解き、将来を拓く意味が埋まっているはずですから。呑んでなくてもホロ酔いのようにボーッとした人間ですが、よろしくお願ひいたします。

院 生 紹 介

今年度スクールリーダー養成コースに入学した院生に自己紹介をお願いしました。今回は6名。次号に続きます。

伊東 直子 いとう なおこ

(福井市中藤小学校)

中藤小学校の伊東直子です。中藤小学校は、平成25年度に新校舎が開校される予定となっています。それに向けて、現在は月に一度、教職員によるワークショップが開かれています。

前任校の松本小学校では、学力向上フロンティアスクールの指定を受け、「生きる力」を身につけるためには単に知識の習得だけではなく、子どもたちの「学ぶ意欲」を伸ばすことに力をいれよう、そのためには授業の中で先生や友達との関わり合いの中で学び合いを大切にしようということ意識した取り組みを行ってきました。

現在の中藤小学校では、めざす授業を「学びの発見」「学びの転換」「学びの広がり」のある授業ととらえ、このような授業をつくるために「学習課題」の吟味を行っています。子どもたち同士が学習課題について活発に話し合う、対話型授業のための「課題づくり」について、研究部を中心に授業研究をしています。

昨年、中藤小学校で行われた「一つの花」の授業では「二重課題」という方法がとられ、研究会で話題になりました。授業の後半で、教師側が持っていた本当に話し合わせたい課題を解くための鍵がいくつか用意してあり、子どもたち



の話し合いが授業のねらいに迫る、大変内容の濃いものになっていました。対話型の授業をつくるためのヒントがいくつ

もあって、とても興味深く参観させていただきました。

大学院ではこのような対話型授業のための「課題づくり」について、もっとこれから研究をしていきたいと思っています。そして、子どもたち一人一人が伝え合い、つながり合う授業づくりを研究していきたいと考えています。

中藤小学校は25年に新校舎が完成し、学校の図書室も地域に開かれた新しい図書室になる予定です。そこで、学校や地域のニーズに応じた新しい図書室のあり方を研究していきたいと思っています。

また新しい中藤小学校では、教科担任制が取り入れられる予定です。中藤小学校の児童の実態に一番合った教科担任制をいろいろと模索し、中藤小学校の先生方と相談しながら、作り上げていけたらと考えています。

川合 浩介 かわい こうすけ

(啓新高等学校)

啓新高等学校の川合浩介です。本年度より福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースでお世話になります。

現在は高校の教員をしている私ですが、実は高等学校へは進学しませんでした。当時は勉強の面白さが良く分からなかったため、中学校卒業後から工場で働いていました。そんな中で17歳の時に出身の神戸市で阪神淡路大震災に被災し、私は運良く五体満足でしたが職を失ってしまいました。そして何もすることのない暇な時間を持ち、自らの生き方を省みる機会を得て、学問をやり直したいと考え



るようになりました。時間はかかったものの大検を取得し、山形大学農学部に入学することが出来ました。教員免許状の講

義を受けており教育実習がとても印象に残っていたこと、大学院での研究が思ったようには結果を出せなかったこと、そして何より高校生活を経験していないことに対する

引け目の様なものを常に持っていたため、いつかやり直したいと考えていたこと等が重なり、いつの間にか高等学校の教員を目指すようになっていました。教員としてのスタートは、福島県の岩瀬農業高等学校でした。力農精神に基づいて生徒達が農業実習を通してたくましく成長していく姿はとても素晴らしいものでした。その後、私自身の家庭の事情により実家に少しでも近い勤務地を探していたところ、現在の啓新高等学校を知ることとなり「可能性への挑戦」というスローガンに惹かれて本校に勤務するようになりました。

現在の職場では私はまだ3年目ですが、校長先生を始めとして先生方はとても生徒思いで常に一生懸命に教育活動に取り組んでおり、生徒達も素直でとても良い学校であると感じています。しかしながら、以前勤務していた農業高校と比較すると生徒達は大人しい印象があり、与えられたことに対しては取り組むことが出来ても、新しく自分で考えて何かしようとする者が少ない気がして悩んでいま

した。おそらく生徒たちの積極性に乏しいのは本校だけのことではないのかもしれませんが。そんな折に、昨年度から教職大学院に通っており本校内でも授業研究会を立ち上げた宮腰先生と話す機会があり、授業を改革することで生徒の学びを改善したいという考えを聞いて賛同し、私も授業研究会に所属するようになりました。研究会では、従来の伝統的な教授法だけでは生徒は伸びず広く新しい授業のスタイルが求められて来ており、他校でも様々な取り組みが成されているということを知りました。本校でもそれに続こうとしています。そのために私も教職大学院で学びながら、生徒が主体となり自らが学びたいと思うから学ぶという本来あるべき姿の学校をつくるために少しでも貢献できるように、学ぶことの楽しさを実感できる授業を本校の生徒にあった形で模索して行きたいと考えています。これからお世話になりますが、どうぞ宜しくお願い致します。

川畑 成央 かわばた なるお

(美浜町美浜中学校)

本年度4月より、教職大学院スクールリーダー養成コースで学んでおります川畑成央です。教員生活19年目(講師時代を含めると20年目)を迎え、現在は美浜中学校に勤務しております。昨年、新校舎が完成し、素晴らしい環境の中で毎日を過ごしています。

20年前は、福井大学教育学部に在籍しておりました。その頃と比べて建物・設備は随分新しくなりましたが、昔と変わらないところもあり、どことなく懐かしさを感じています。また、2年前に嶺南教育事務所に研究員として勤めていたときには、寺岡先生、長谷川先生に何度か小浜まで来ていただき、事務所の研究員と教職大学院との合同カンファレンスを開催していただいたことがあります。今回、こうして自分が大学院にお世話になることになり、不思議な縁を感じています。

嶺南教育事務所に勤めていた2年間、研究員として「教の資質能力向上」をテーマに、「授業リフレクション」「ワークショップ型授業研究」など、主に教員研修・授業研究の形態について研究していました。この2年間は、多くの書籍やさまざまな実践事例に触れることができ、たくさんのことを学べた貴重な2年間でした。しかし、学校現場を離れての研究でしたので、実践という面では少し物足りな

い部分もあったように感じます。

教職大学院では、学校現場での実践とその振り返りが中心となります。日々の教育実践を、他の学校の先生方と交流し合うことによって自分の実践を客観的に捉え直し新たな発見をしたり、他の先生方からさまざまな刺激を受けたりできます。4月の合同カンファレンスでは、この教員同士が学び合う雰囲気に触れ、たくさんのエネルギーをいただいたような気がします。

現任校の美浜中学校は、教職大学院開設時に「拠点校」として指定を受けました。この頃から、大学院の先生方のお力もお借りして、学校全体で授業改善に取り組むようになり、「授業改善グループ」を組織し、授業研究に取り組んでいます。研究主任として、大学院での「協働」のスタイルを校内の授業研究会の中にも取り入れ、さらには生徒の学びのスタイルにも反映させたい、という思いがあります。そのために、この大学院でたくさんのことを学びたいと思います。よろしくお願いします。



金鑄 善朗 かねと よしあき

(福井市至民中学校)

至民中学校に赴任して6年目に入りました。その間に、旧校舎から新校舎になり、学校のシステムも問題解決型学習、70分授業、教科センター方式、異学年型クラスター制など、大きく変化しました。それに併せて、私自身も大きく変わった5年間だったように思います。まずは授業です。至民中に赴任する前も、「いい授業をしたい、そのために教材研究をしなければ」と思っていました、なかなか実行できず、毎年同じ授業を繰り返すだけでした。しかし、今は他の理科の先生や他の教科の授業を見たり、授業を公開してご意見をいただいたりしながら、より良い授業をめざして研究するようになりました。これは、至民中が授業公開を積極的に行っているため、良い刺激がたくさん得られるからだと思います。次に意識です。今は研究組織の1つである、運営C部会の部長をしています。この部会は総合的な学習の時間の運営について考える部会です。先輩の先生方もいらっしゃる中、わりと自由にやらせてもらっています。至民中には、自由にものが言える雰囲気と、若手の意見もどんどん取り入れようとする姿勢があるので、自分の企画が通り易く、学校のために役に立っているという実感を持ち易いので、「もっと何かしたい」という意欲がわいてくるようになりました。至民中学校は福井市の特別研究指定校になっています。研究というと大変なよ

うに思いますが、至民中でやっている研究は特別なことではありません。システムが他の学校とちがうだけで、「良い学校を創る」という目標

には変わりありません。ただ、至民中のシステムは、新しいことがやれる、わりと自由があるシステムだと思います。そこでいろいろなことを提案したり、実行したりすることで、自分が変わってきたのだと思います。

ただ、このままでは独りよがりになりかねません。自己紹介の文章にこんな偉そうなことを書いている時点で、すでに天狗です。教職大学院の2年間は、至民中での6・7年目に当たります。運動部顧問も外れ、じっくりと学ぶ環境もできました。そこで、教職大学院では、いろんな先生方からご指摘やアドバイスをいただきながら、自分を見つめ直し、学ぶ者として謙虚な態度で、中身も見たいも、より良く成長していきたいと思います。

今年の目標は、有言実行。まずは生徒の前で宣言した「細マッチョになる！」から。中身といっしょに見た目の成長もご期待ください。どうぞよろしくお願ひします。



見崎 洋之 みさき ひろゆき

(福井市安居中学校)

今年度から教職大学院で学ばせていただくことになりました安居中学校の見崎洋之と申します。福井大学を卒業し、10年以上前には学校カウンセラー研修で学んだことがあります。その頃すでに教職大学院のさがげ的活动があり、仲間とともに参加させていただいたことは懐かしい思い出です。これからの2年間は、本校の研究主任という責任も背負いながら、学校を代表する気持ちで学んでいきたいと考えております。

さて、私たち安居中学校の教職員は、ある大きなことさらに直面しています。それは、2年後の春に、小中併設である現在の学校から中学校が分離・移転し、新しく安居中学校として生まれ変わることです。これまで、

小中合同の研究組織でさまざまな実践を行ってきました。学校祭やボランティア活動を合同で開催するなど、

児童生徒の縦のつながりがとても強い学校です。そのつながりを大切にしながらも、今後の小中分離へむけて研究体制を再構築するとともに、小中合同行事や小中連携のあり方を見直していく必要があります。

また、県内で3校目の「教科センター方式」の学校として教育活動を行っていくことが決まっています。先進



校である至民中学校や丸岡南中学校から学ぶ部分も多々あると思われませんが、学校の規模や生徒の特性、地域性なども考慮した上で、小規模校の特性を生かした本校独自の教科センター方式のあり方を探っていくことが大切です。

これらの大きな課題の解決にあたっては、本校の教員が力を合わせて取り組んでいくのはもちろんのこと、大学の先生方や院生の方々と意見を交換し、幅広い視点から考察していきたいと考えています。4月の合同カンファレンスでは、新しい安居中学校の平面図(教室配置図)を見ながら教育相談に関する話も交わされ、参考となる

点がいくつもありました。また、外部機関における教員研修についても有意義な情報を得ることができました。

安居中学校の開校までの2年間で、私の教職大学院の在学期間とちょうど重なります。「小規模校における教科センター方式のあり方」を研究の中心に据え、現場に生きる研究実践に取り組んでいきます。これまで我々が行ってきた教育活動の優れた部分を大事にしながら、「生徒・地域の人々・教職員のみんなが来なくなる学校づくり」を目指して研究を進めていきたいと考えています。今後ともご協力・ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

渡邊 朋重 わたなべ ともしげ

(坂井市立丸岡南中学校)

平成22年度福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました渡邊朋重です。教職について今年で20年目、現在勤務する丸岡南中学校に開校と同時に赴任し今年で5年目を迎えました。私が勤務する丸岡南中学校は、県内で初めて教科センター方式を採用して、全国有数のマンモス校であった丸岡中学校から分離新設された学校です。斬新な建物である事に加え、異学年による縦割り集団であるスクエア制による生徒会運営や、生徒の主体性を尊重した生徒指導の考え方など、新しい理念のもとに創設されました。当初は、年間2000人以上が来校する中、教職員も生徒たちも誰一人経験したことのないシステムや校舎にとまどい、試行錯誤を繰り返しながら手探りの毎日だったことが思い起こされます。さらに、教科センター方式ということで、教科指導、すなわち授業にウエイトがかかってくる。これまで大規模校しか経験のなかった自分が、いかに授業研究をおろそかにしていたか、同僚に頼り切っていたかを思い知らされることとなりました。そんな私が昨年からは、なんと研究主任に！これまで、研究、と聞くと及び腰だった自分に、研究を推進する立場、マネジメントする立場なんて務まるのだろうか。当初から大変悩みまし

たが、研究推進委員をはじめとする良き同僚の先生方、管理職の方々に恵まれ何とか1年間進めてくることができました。そんな中、この福井大学教職大学院で学ぶ機会をいただくことになりました。このお話を頂いた時は、「こんな私にできるのだろうか」という不安しかありませんでした。でも、自分自身の教師としての力量アップにつながり、本校の研究推進に役立つのであればと思い、この機会を逃がすべきではない、と決心しました。

まだ1回目の合同カンファレンスを終えたに過ぎませんが、専門的な知識や、たくさんの方々との出会いにわくわくしている自分がいることに気づいています。たくさんの方々に助けていただきながら、また様々な方々にご迷惑をおかけしながら迷走する2年間となろうかと思いますが、「常に前向きな姿勢」を忘れず、がんばっていきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。



拠点校だより

福井大学教育地域科学部附属幼稚園

林幸恵

4月12日に新入園児49名を迎え入園式が行われた。親子共々緊張の中にも幼稚園生活への期待に満ちあふれた様子がかがわれた。さあ、今年度も新入園児を含めた124名の幼児たちの成長を支える保育がスタートするんだなと改めて実感し、気持ちを引き締めた。

本年度の新しい研究体制もスタートした。本年度は、「伝え合う ひびき合う～協同して遊ぶ姿を求めて～」を研究主題とし、遊びの中で幼児の伝え合い、ひびき合う姿の変容を探り、協同する姿を求めていく。そのため、研究のねらいは、事例研究を通して「好きな遊び」の時間と一斉活動の「みんなの時間」のつながりを明らかにするとした。

幼児は、幼児期にふさわしい生活を通して、他の幼児とのかかわりの中で自発性を発揮し、この自発性を基盤として、より生き生きとした人間関係を繰り返して広げていく。さらに、こうした人間関係の中で、幼児が互いにかかわりを深めて共に活動しながら一つの目的を共有し、それを実現しようと試行錯誤したり、折り合いをつけたり、課題を解決しながら遊ぶことができるようになる。それは、幼児が興味関心を持ったり必要感を感じたりして、主体的に取り組む姿を通して育つ力であり、与えられた目的に応じて活動するだけでは得ることができない姿である。

幼児の協同して遊ぶ姿の土台を築き、その経験を積み重ねる姿を支えるために、「好きな遊び」の時間と、一斉活動の「みんなの時間」における遊びの振り返りでの教師の心構えの重点も考えた。

- 1 幼児が感じていること、実現したいことを受け止め、幼児が必要とするときに応じながら、自己発揮を支える。
- 2 幼児の心の動きに沿って、共に心を動かしたり知恵を出し合ったりしながら、充実感・満足感を持たせる。

3 一人一人の伝え方を理解し、その幼児らしい考え方や思いを大切にしながら、良さを認めていく。

このような心構えで、「どのような経験が生かされ、つながりながら協同して遊ぶ姿となるのか」という視点で遊びの事例を集積して事例研究を行っていく。また、幼児の育ちを多面的に捉え教師の援助の在り方や環境構成を検討する場として定期的にケース会議を行う。これらを研究の中心として進めていくこととなった。

研究の方向性を示し本幼稚園の研究に対する意見を広く請うため、6月12日（土曜日）には、公開保育を開催する。午前中は保育を公開し、午後は全体会で研究の概要を報告する。また、福井大学の先生方によるシンポジウム「3歳児・4歳児・5歳児の協同について考える」も行う。また、各学年の保育を協議する分科会も設ける。保育関係者のみならず、小中学校の先生方やその他の機関の方々の参加も受け付けている。一人でも多くの参観の方々が集まり、実り多き公開保育にしたいと職員一同頑張っているところである。

多数ご参加いただけますよう、よろしくお願い致します。



福井大学教育地域科学部附属小学校 名葉浩行

本校は、福井市の中心部よりやや北側に位置する福井大学附属の小学校です。自主協働の精神で認め合い高め合いながら、自由で清新な学校づくりをするために、「夢を持ち、心豊かに生きる子 ～感じ、求め、表し、思いやる～」を教育目標に設定しています。児童数は、1クラス40名までの学年2クラスずつで440名ほどの規模です。毎年秋に教育自習を行い、12月には研究集会を開催し、授業公開をしています。教育実習校としての使命と研究実践校としての使命を持って教育活動を行っています。本校の子どもたちに目を向けてみると、豊富な知識を持ち、好奇心が旺盛で、興味のあることに対して大変意欲的に活動に取り組む子が多い反面、自然に触れ合ったり実際に見て確かめたりするなどの実体験が少なく、知識偏重に陥っている子が多いことや本校には校区がなく地域性も薄いため、親や教師以外の大人や異年齢の子たちとの交流が少ないといった特徴も見られます。そのため、本校では、低・中・高学年それぞれのまとまりで季節ごとに主に野外で活動する学団活動と呼ぶ行事を行っています。自然の中での活動を通して、子どもたちの団結を高めるとともに、校内の様々な行事に向けて、結束を高める大きな意味を持つ活動です。総合の時間や学活の時間を中心にして、子どもたちを中心に計画・準備を進めます。異学年の仲間との活動を通して、目的を達成し、喜びを分かち合うことを感じるとともに、上の学年の子はしっかりリードすること、下の学年の子はフォローすることの大切さを体得することができると思っています。

本校では今年度は、「協働して学びを深める授業をつくる」を研究主題に掲げています。昨年度までは、「つながり合って育つ」をテーマに「子どもの育ち」に焦点を当てた研究を進めてきました。子どもたちは、日々の学校生活の中で、仲間や事象、教材や教師とのかかわり合いの中でつながり合い、新しい自分をつくっていきます。その営みの繰り返しが、子どもたちの育ちへとつながっていくと考えています。本校の研究は、様々なつながり合いのもとに学んでいく子どもたちの姿を考えるとともに、それを支える教師のありようについても考えていく研究、言い換えれば学校全体を包み込む研究であるとも考えることができます。

今年度は、授業の中で仲間とつながり、様々な学びを

していく子どもの姿を見い出していこうと考えています。一人での学びと仲間との学びを相互に関連させながら、学習を深める工夫に努めます。そのため、低・中・高学年の3つの部会に分けて、それぞれの学年で見られる子どもの姿を出し合いながら研究を進めています。研究を進めていく上で大切にしていることは、「見合う」「語り合う」「読み合う」という教師の協働研究です。低・中・高学年部会でそれぞれ公開授業を行い、授業で見られた子どもたちの姿を話し合う校内授業研究会、実践記録を読んで話し合うバズセッションなどを行っています。

校内授業研究会での公開授業に向け、それぞれの部会の教師集団で、子どもたちの現状をもとに協働して学びを深める授業づくりについて考えていきます。子どもたちの協働する姿、さらに学びを深める姿をどのように引き出すか、今年度のテーマに迫るような話し合いを行います。そして、授業後の研究会では、そのときの子どもたちの協働の場面や学びが深まった場面について、具体的に話し合っていきます。具体的な子どもの姿を出し合うことで、一人一人の学びがどのようなものであったか、知ることもできます。専門教科であるか否かにかかわらず、教科を超えて実践を行ったり、授業研究会を積み重ねたりして、一人一人の教師の指導力を高めていきます。

春、夏、秋、冬と年4回行われるバズセッションでは、これまでの実践記録をもとに、「協働して学びを深める」子どもの姿や授業について考えていきます。実践記録は、単元を通して子どもの姿を追うようにしてまとめてあり、子どもがどのようにして学びを深めていくのか、そのときの教師の思いはどのようなものであったかを知ることができます。このバズセッションには、教職大学院の先生方や本校の研究助言者の先生方にも参加していただき、本校職員にとってもよい刺激となっています。

このように、教師が協働で研究を進めていくことで、教師間のつながりが密になり、授業観や教材観について影響を与え合うことができます。また、教師の協働によって育てたい子ども像を共有していく中で、子どもに培いたい力とは何かを考え、学年間の学びの連続性についてより具体的に考えていくことができていると実感しています。

福井大学教育地域科学部附属中学校 竹内雅子

昨年から教職大学院で学ばせていただき、他校種のいろいろな先生方とお互いの実践を話し合う機会をもつことができました。そんな中で、教員としての自分の歩みを振り返り、現在勤務している附属中学校を改めて見直し、これからの自分の課題に気づいていくことができてきたように思います。

附属中学校は、長年にわたって「探究」と「コミュニケーション」をキーワードに、教育活動のなかに「主題—探究—表現」というプロジェクト型の学習形態を取り入れ、その教科がねらう本来の学びが実感できる授業を全校でめざしてまいりました。そして学びを拡げ深めるために、より豊かな子どもたちのコミュニティを創っていくことをめざしています。

附属中学校に赴任した当時、保健室で何気なく「学校は楽しい？」と子どもたちに聞いてみました。すると「楽しい。」と答える子が多いことに驚きました。それは子どもたちが自ら創り上げる行事や、自らが学び合う授業を展開しているからだろうと思いました。

学び合いは子どもたちだけでなく、教員集団も同じように「探究」と「コミュニケーション」をキーワードに協働研究体制がとられています。実践を語り合える実践コミュニティを学校で創ることの意義を教職大学院で学び、附属中学校の研究体制の素晴らしさと意義を改めて実感することができました。

私は附属中学校で毎年教育研究集会の公開授業を中心に探究型の保健学習を考え、3年間の健康教育カリキュラム研究を行ってきました。

授業をどう創るか悩むところですが、他教科の公開されている授業をなるべく見せてもらい参考にしています。本校では全ての先生方が気軽に授業を公開し合い参考にしたり、アドバイスしたりするといった環境が整っています。

附属中学校には、経験年数と教科を考慮して4~5名

の教員
で編成
されて
いる
A, B, C,
Dの4つ

この校訓は附中に生きています

同協主自 校訓

の部会があります。各部会は、週1回時間割の中に位置づけられています。そこでは全体研究会では臆してしまって聞けないような質問もでき、多くのことを教えてもらうことができます。初めは他教科の先生方と実践を話して、意味があるのだろうかと思いました。しかし、子どもの筋から授業を創っていく悩みは共通しており、また他教科の話を聞きながら自分の実践と照らし合わせて考えることができ、大変参考になります。

そして、自分の実践を物語風にレポートに書き、夏と春に教職大学院の先生方もお呼びして実践について語り合い聞き合う場を設けています。初めは“記録を書く”ことが苦痛でした。しかし授業記録を書き、それをもとに他の先生方から意見をもらい実践を振り返り、意味づけをしていくことが、次の実践を繰り返して上げるために大切だと実感しています。また大学の先生方に自分の実践の意義づけをしていただき、実践の構造について語っていただける環境は恵まれていると思います。

長年本校の研究に関わっていただいている東京大学大学院教授の秋田喜代美先生は、本校の2004年の出版本“中学校を創る 探究するコミュニティ”の中で、『福大附中の特徴を一言で表すならば、「学び続けていく可能性を探究する」という「学校文化」を、生徒も教師も共に問うている学校である。』と書かれています。実践記録を書いて実践を振り返ることで、課題が見えてきます。「探究するコミュニティの在り方とは?」「より質の高い学びにするには?」悩みはつきません。探究的な実践を通し、子どもたちはもちろん教師もより向上していきたいと考えています。今年度は6月4日に第45回教育研究集会を行います。子どもたちの学びをライブでご参観下さり、忌憚のないご意見、ご助言をいただければ幸いです。

学年プロジェクトの集大成 3年生の文化祭での演劇

(総合的な学習の時間)



昨年の教育研究集会の授業風景です



「開校 40 年目， 附属特別支援学校， 新たな展開へ」

福井大学教育地域科学部附属特別支援学校

水野雅人

1 学校の概要

本校は、知的な障害を持つ子どもたちを対象にした福井県で最初の養護学校（現 特別支援学校）です。昭和46年に創立され、今年で40年目を迎えることになりました。学校には、虹の画家とも呼ばれる・靨嘔(あいおう)氏による色彩豊かな大きな壁画「平和の楽園」が作られており、「壁画のある学校」とも呼ばれています。



本校は、小学部・中学部・高等部があり、12カ年を一貫とした教育を推進しています。小学

部は、低学年，中学年，高学年，中・高等部は、学年の枠を外したクラス編成で、各学級に1～3年生がいる縦割りのクラスで複数担任によるチームティーティングを行っています。本校では生活教育（生活の営みを教材として、生活していく力を高める教育）を行っており、それに基づいた学校生活をしています。言いかえれば、子どもの思いを大切にしながら、生活に根ざしたものづくりや体験を重視した教育活動を行っています。また、個別教育計画（いわゆる個別の教育支援計画）に基づき、一人一人の特性や発達状況に応じて指導のねらいを立て、個別指導やグループ指導を行っています。実際には、「あそび，くらし，仕事，表現，ゆうゆうタイム，オープンクラス」など独自の時間割を設定し、活動しています。その際には、じっくりと児童・生徒が各自のペースで活動できるようにチャイムは給食開始と下校時の2回としています。そして、平成9年度からは、異年齢の集団活動である全校縦割り活動（現 レインボータイム）を週1回、6つのグループ（アウトドア，クラフト，ウッド，クッキング，スポーツゲーム，ミュージックアート）に分かれて、相互の学び合いや関係を大切にしながら1，2学期に行っています。また、数名の校医の先生方が月数回，来校して健康相談を行い，アドバイスを頂くなど医療との連携を大切にしています。また，最近では，教材研究や教育実習の学生だけではなく，医学部の看護学科や医学科の学生も1日間実習するなど，本校に

かかわる方も増えてきています。

2 研究テーマと内容

全体テーマは、「自分らしく生きる学びの創造」で、今年度は、4年計画の3年目となり、研究集会は10月8日に予定しています。なお、今回は本校が福井県養護学校教育研究会の当番校となり、研究集会と研究会を兼ねることになっています。テーマの副題は「ICFを学校で活かし、自立と社会参加につなげる」というように文中にICFという言葉を入れたテーマが例として検討されているところです。研究内容としては、①ICF（国際生活機能分類）を授業の中でどう絡めていくか、環境因子としては人，物などの要素がありますが、学校環境の整備という点で、つい最近，校舎の全面改築の話が持ち上がり，今後の研究とも深くかかわっていきそうな状況です。②教育課程については，研究部が主導して学部ごとなどに生活年齢で目指すことを検討，提案していく。③「異年齢」については，研究集会後，レインボータイムの今までの実践の検証や学部における様々な場面での異年齢集団利用を仮説し，試行・検証を行い，問題点を明らかにしていく，以上のことを考えています。

3 研究組織と私のかかわり

研究組織は、今までの2年間とは変えて、小・中・高等部の学部の枠を外した教員の縦割りの分科会を3つ設け、研究を進めていくことにしています。学部を超えてお互いの授業を見合ったり、そして、子どもたちを含め、授業に乗り入れたりということも考えられています。それによりクロスセッションをより実のあるものにし、「12カ年一貫教育」や「教育課程の見直し」に迫っていけると考えています。私自身は研究部には所属していませんが、今年度は、特別に、研究部会に参加する中で、長期の実践事例を通して研究テーマに迫っていきたいと考えています。なお、本校では、12年間など長期にわたる事例を中心にした本の出版の計画も進んでいます。出版されたその折には、手にとって見て頂けると幸いです。



平成 22 年度の更新講習がスタート!

長谷川 義治 / 教育地域科学部等教員免許状更新講習運営委員長

平成 22 年度の福井大学教員免許状更新講習の予約申し込みが 4 月 23 日に終了し、5 月 15 日の「小学校理科教育の実験と授業づくり」を皮切りに、本年度の更新講習がスタートする。更新制度の見直しの動向にも触れながら、今年度の更新講習の予約申込状況等を報告する。

平成 21 年秋に政権交代が実現すると間もなく、その年の春から施行された「教育職員免許法」の見直し等が報道された。しかし、文部科学省からは、今日現在でも、それに関する公式見解は示されていないし、法改正のスケジュールさえも示されていない。そもそも、民主党のマニフェストでは、「教員の質（養成課程を 6 年制に）と数の充実」として、「免許更新制度を抜本的に見直し」することと、「教員の養成課程は 6 年制（修士）」にすることを一連のものとしてとらえられている。両方をにらみながらの法改正となると、短期間で形にできるものでもないことぐらいは理解できる。

今年 3 月、「宙に浮く教員免許更新制 『見直し』進まず現場混乱」などの記事が掲載されたが、その辺りの状況を踏まえてのものである。

しかし、「免許法」は今現在も生きていて、免許状を更新するには、30 時間以上の講習の受講・修了が義務付けられているわけである。

福井大学は、平成 24 年 3 月末までに更新手続きを完了ことになっている、いわゆる「第 2 グループ」の教員等が、そのような「混乱」に対して、どう対応しようとしているのかを把握すべく、県教育委員会に依頼して、更新講習受講の予定を調査していただいた。その結果を踏まえて、平成 22 年度更新講習実施計画を文部科学省に申請し、その承認を受けて、4 月 5 日～23 日の間に受

講予約申し込みを行った。予約申込者数が、最少開講人数に達しなかった 2 講習を開講しないこととし、今年度実施する講習は、必修が 3 講習、選択が 33 講習で、予約申込者数は、必修が 286 名、選択が 549 名となっている。

昨年度の受講者数の実績が、必修 7 講習で 481 名、選択が 51 講習で 1,066 名であったことから見ると、「混乱」の影響が少なからずあったととらえている。

なお、必修領域の講習については、いわゆる「福井大学方式」として、昨年度同様、必修 2 日間（12 時間）と選択 1 日間（6 時間）を合わせ、連続 3 日間（18 時間）の形で計画した。これは、福井大学教職大学院が合同カンファレンスなどで実施している方法を更新講習でも取り入れたものである。しかし、その趣旨を説明する場がなかったことも影響しているのか、3 日間連続で受講する者の割合は、36.0%（103 名）と昨年度の実績 68.4%（329 名）を大幅に下回り、これについては心残りである。

また、昨年度の必修領域の講習のまとめとして、「2009 年度報告書」を本年 3 月に発刊したが、その中に、受講者 28 名の方々の御理解・御協力をいただいて、提出してもらったレポートも掲載した。これについては、今年度以降の必修領域の講習の中でも十分に活用し、より充実した講習にしていきたいと考えている。

予告

6/4 fri 9:00-16:30

福井大学教育地域科学部附属中学校

第45回 教育研究集会

学びを拓く《探究するコミュニティ》(3年次)

ー学びの必然性を問うー

福井大学教育地域科学部附属中学校では、「探究」と「コミュニケーション」をキーワードとして、子どもも教師も学び合う「探究するコミュニティ」の実現に向けた研究を進めてきました。これから、さらにこの「探究するコミュニティ」の在り方を模索し、より質の高い学校文化へ高めていこうと考えております。

今年度は、「教科を学ぶ必然性」「問いを追究していく必然性」「協働する必然性」、これらの学びの必然性について、私たちのコミュニティは実践を振り返ったり、新たな单元デザインを構想したりする中で協働で探究しています。

■ 日程-----

8:30	9:00	9:20	9:40	10:30	10:50	11:40	12:40	14:00	14:20	14:50	15:00	16:30
受付	オリエンテーション	移動	公開授業Ⅰ	休憩	公開授業Ⅱ	昼食	分科会	移動	全体会	休憩	シンポジウム	

■ シンポジウム-----

学び合いはどこから生まれ育まれるのか

- 秋田 喜代美 先生(東京大学大学院教育学研究科 教授)
- 鹿毛 雅治 先生(慶應義塾大学教職課程センター 教授)

子どもたちは、附属中が大切にしていることを先輩から継承しながらも、先輩を超えようと協働で挑戦していきます。私たちは、日々の実践を振り返りながら省察し、授業デザインやカリキュラムの研究に協働で挑戦しています。コミュニティのメンバーが替わっても大切にされ続ける「学び合い」。学び合いは、子どもの間にも、教師の間にも、子どもと教師の間にも生じると思いませんか。講師の先生のご意見を伺いながら、一緒に「学び合い」について考え、プロセスを辿りましょう。

■ 申し込み方法-----

- 申し込み方法や交通機関の詳細は、<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-j/> を参照ください。
- 平成22年5月31日(月)までに、申込用紙を郵送またはファックスでお送りください。
- 会費は2000円です。
- 問い合わせ先 〒910-0015 福井市二の宮 4-45-1

福井大学教育地域科学部附属中学校 教育研究集会 受付係

TEL: 0776-22-6985 FAX:0776-22-6703

6/12_{sat}

福井大学教育地域科学部附属幼稚園

平成 22 年度 **公開保育**

伝え合う ひびき合う

—協同して遊ぶ姿を求めて—

公開保育	9:00～11:30
全体会・シンポジウム	12:50～14:20
分科会	14:30～16:00

シンポジウム 3歳・4歳・5歳児の協同について考える

司会 松木 健一先生 (福井大学教職大学院)

パネリスト 【3歳児】 竹内 恵子先生 (福井大学教育地域科学部)

【4歳児】 石井 恭子先生 (福井大学教職大学院)

【5歳児】 岸野 麻衣先生 (福井大学教職大学院)

	指導・助言者	研究協力者
3歳児	竹内 恵子 先生 (福井大学) 森 透 先生 (福井大学)	神門 豊子 先生 (越前市私立ひかり幼稚園) 吉川 裕子 先生 (福井大学附属中学校)
4歳児	山本 雅代 先生 (福井県教育委員会) 松木 健一 先生 (福井大学) 石井 恭子 先生 (福井大学)	前田 栄子 先生 (福井市西安居保育園) 水野 雅人 先生 (福井大学附属特別支援学校)
5歳児	平田 佳代子 先生 (福井市教育委員会) 松友 一雄 先生 (福井大学) 岸野 麻衣 先生 (福井大学)	道坂 由美子 先生 (福井市麻生津幼稚園) 有馬 博美 先生 (福井大学附属小学校)

●参加申し込み方法 5月28日(金)までに申込用紙に記入の上お送りください。

●参加費 500円

●問い合わせ 福井大学教育地域科学部附属幼稚園

〒910-0015 福井県福井市二の宮4丁目45-1

TEL 0776-22-6687 FAX 0776-22-6718

6月のラウンドテーブル・速報

主催：福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）

6/26

sat 13:30-17:00

専門職として学び合うコミュニティ

Session I 13:30-14:10 全体会「専門職としての実践力を培う」

さまざまな領域において、専門職としての実践力とは何か、そしてその力をどう培っていくのか、実践と研究が進められています。5つの領域からそれぞれの取り組みについて語っていただきます。

Session II 14:20-17:00 4つの領域「専門職として学び合うコミュニティ」

領域ごとに、専門職としての実践力を培う学びをどう実現していくか、それぞれの職場・地域・大学での取り組みを踏まえて語り合います。①学校における協働研究 ②コミュニティの学習を支援する専門職 ③特別なニーズのある人を支える学校と地域 ④医療・看護の専門職における実践力形成

6/27

sun 8:45-14:20

実践研究福井ラウンドテーブル

はじめに 8:45-8:55

Session III 8:55-12:00 展開を語る／プロセスを聴き取る

小グループに分かれ、実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語るとともに、語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきます。教育・医療・福祉の多様な分野の実践者、学部で学ぶ学生など、様々な立場の参加者を予定しています。8:55-9:10（自己紹介） 9:10-10:30（報告1） 10:40-12:00（報告2）

Session IV 13:00-14:20 二日間のセッションを振り返る／省察的実践のために

午前中と同じグループで、ラウンドテーブルの二日間のセッションで語られたこと、聴き取ったこと、考え始めたこと。ふり返り、次のそれぞれの、そして協働の実践につなげていきたいと思えます。

●申し込み●

準備ができ次第、福井大学教職大学院のホームページ（<http://www.fu-edu.net/>）にプログラムの詳細と申し込み方法を掲載します。なお、両日とも実践報告者を募集しています。報告いただける方は申し込みの際にお知らせください。

（※2010.05.22速報版につきプログラムの変更等があり得ます。）

